

## 報 告

## 第八十九回經濟研究会報告

十月七日(火) 於 經濟学部研究室

發表者 今西正雄教授

司會者 岡 光夫教授

テーマ「アメリカ・ラチナ社会經濟史考」

— その共通問題とアシエンダの形成過程

(出席者)

小松、宗藤、松井、黒松、中島、西川(良)、小野、入江、辻、西川(宏)、藤村、今村、森、島、小森、渋谷、神代

一九五〇年代の世界的関心が「東西問題」にあつたとすれば、一九六〇年代のそれは「南北問題」にあるといつてよいであろう。右の問題中、ここで取り上げたのは、かつて西ヨーロッパの前期および初期資本主義社会の形成に「植民地」として多大の貢献を果たし、さらに現在では「南の問題」の一角をなすアメリカ・ラチナ (America Latina) の社会經濟を、その共通的諸問題と大土地所有形態たるアシエンダ (Hacienda) の形成過程から検討したものである。同時に、この種の研究はここ数十年來世界の各学術界において真剣に研究されているものであつて、アメリカ合衆國ソビエトはもちろん、日本学術界においても次第に脚光をあびつつある。

ところで、今日のアメリカ・ラチナの学術にあつて重要な役割をなしつつあるプレビツシュまたはウルキデイ教授たちは、この二十カ國に上る地域を「一つのアメリカ」として再考し、その「低開發の諸原因」を研究すべきであると強張している。そして、とくに顯著な「共通問題」としては、「対アメリカ合衆國との關係」、「教育、宗教問題」、そこに重要な經濟分野の「經濟的低開發性、インフレーション、モノカルチボ (monocultivo) 經濟、さらに土地の極端な不均衡的分配」などが上げられるが、そのすべてに通じる基本的矛盾としては、やはり同地域に存在する大土地所有制に焦点が絞られてくる。

そこで、この大土地所有制の發足たるアシエンダの形成過程を社会經濟史的に觀察したのであるが、その第一期形成はいわゆる植民地時代のエンコミエンダ (encomienda) に求められ、次いで第二期形成は同地域の政治的地主的獨立後から二十世紀初頭に至るカウディリヨ期 (Periodo de Caudillo) に樹立されたことを追究した。なお、これの諸文献および資料として、エスパニョールおよびポルチュゲエスの原文書、アメリカ・ラチナの資料、さらにアメリカ合衆國および東ドイツ、日本の諸研究を使用し、結論において、これがいかに同地域の社会經濟的發展を阻害しているかを明らかにするとともに、その解決方向がクーバ的社会主义化にあるのか、メヒコの半革命にあるのか、もしくはその他諸國にみられる漸次的改良主義を中心とする民主化經濟にあるのかを相互に比較検討したのである。